

## ジュンナル石窟マーンモーデー第四十窟の造営意義に関する一考察

—銘文とファサード彫刻を手掛かりとして—

豊山 亜希

はじめに

インド共和国西部マハラシュトラ州には、今日インドに現存する石窟寺院千二百窟余のうち約一千窟が集中している<sup>①</sup>。同州第二の都市プネーの北方約九十キロメートルに位置するジュンナル石窟は、同名の町を囲む四つの丘陵に穿たれた九支群によって構成され<sup>②</sup>、主要窟だけでも百八十窟余にのぼる、インド最大規模の仏教石窟群の総称である「図1」<sup>③</sup>。開鑿時期は、建築様式や銘文の字体から、紀元前一世紀〜紀元後二世紀頃に比定されており<sup>④</sup>、前二〜後三世紀と後五〜八世紀に分けられるインドの石窟造営時期<sup>⑤</sup>のうち、前期をほぼ通して造営されたことが理解される。

ジュンナル石窟は、窟数に比して銘文数も豊富であるため、文字資料に重点を置く歴史学分野においては、古代社会を知る上での有益な資料として、しばしば考察対象に含められてきた。一方で、装飾表現がきわめて少ないた

め、アジャンター石窟やエローラ石窟など豪奢に荘嚴された石窟寺院に考察が集中している美術史分野にあっては、研究対象として取り上げられることは殆ど無かった。銘文記録などの文字資料があくまで古代社会像のイメージを推察させるに過ぎないのに対して、美術表現はそれらを具体的に視覚化して伝えていることから、双方を両立させることによって、石窟寺院造営を促した社会的様相をより明確に知ることができると思われる。この見地において、ジュンナル石窟の建築様式や数少ない彫刻は、豊富な銘文資料と併せて考察されるに十分な資料的価値を有している。その中でも、マーンモデーイ丘陵に位置するブド・レーナー石窟のチャイティア窟、すなわちマーンモデーイ第四十窟〔図2〕は、そのファサードにおいて、ジュンナル石窟中最も豊富な彫刻作例を有し、銘文も刻出されていることから、美術史分野からの詳細な考察と文字資料との照合を通して、古代社会像をより具体的に知ることを可能とする研究対象である。

本稿においては、マーンモデーイ第四十窟ファサードに見られる造形要素について詳述することからはじめ、銘文の字体と内容の分析を並行することによって、造営年代に対する見解を与える。次に、特に注目される造形要素について、同時代の美術表現との関連性から検討を加えるとともに、造営時期の社会的様相について明らかにする。結果として、マーンモデーイ第四十窟ファサードの造形要素と銘文記録から、先行の石窟研究においては明らかにされなかった、より具体的な紀元前後のインド社会像を提示したい。

## 第一章 マーンモーデー第四十窟堂内の造形的特徴と造営年代

マーンモーデー丘陵は、ジュンナルの南方約一キロメートルの地点に北西く東南方向に延びており、その北側崖面約一・二キロメートルの幅において、東側からビマー・シャンカル、アンピカー、ブド・レーナーの三石窟群が分布している。インド考古局は、これら三支群を統合しマーンモーデー石窟として窟番号を付しており、第一窟く第十七窟がビマー・シャンカル石窟、第十八窟く第三十四窟がアンピカー石窟、第三十五窟く第五十五窟がブド・レーナー石窟となっている<sup>(5)</sup>。通常、一つの石窟群はチャイティア窟（礼拝窟）一窟と複数のヴィハラ窟（僧院窟）によつて構成されて仏教僧院として機能しており、ブド・レーナー石窟においても、本稿の考察対象である第四十窟が、窟群中唯一のチャイティア窟である。

北東面に開口するマーンモーデー第四十窟あるいはブド・レーナー石窟チャイティア窟は、長方形の堂内が円形の奥壁で閉じられた馬蹄型プランを呈しており、奥壁の形状はその前面に彫りだされたストウーパ（仏塔）に沿うよう意図されたものである〔図3〕。右側壁には四本の柱が彫りだされるのに対し〔図4〕、左側壁は切り込みを入れた段階で放棄されていることから、左側壁も同様に列柱式とし、左右の列柱によつて堂内を身廊と側廊に分割する計画であったことが理解される。さらに、身廊の幅と開口部の幅はほぼ一致しており、右側壁がストウーパ脇で直線的に切り取られていることから、一般的なチャイティア窟の形式と同様に、奥壁にもストウーパの周囲に列柱を配し、聖的装置の周囲を歩いて礼拝するための通路、いわゆるプラダクシナ・パタ（繞道）とする意図があったものと推察される<sup>(6)</sup>。

右列柱は柱頭および柱基を持たず、床面とドーム型天井の基部を支える水平帯の部分に八角の柱軸が直に接して

いる。柱軸の床面に近い部分に切り込みのようなものが見られるが、柱基をつくろうとしたものかどうかは断定し得ない。石窟寺院の柱の様式は、最初期においては柱軸のみの無裝飾柱で、次段階で柱基、続いて柱頭が設けられるようになる<sup>⑧</sup>。柱の様式のみからマーンモーディー第四十窟の造営年代を考えると、無裝飾で柱軸のみの八角柱であるため、早い時期を想定することができる。しかしながら、同様の柱軸のみの様式においても、バージャー第十二窟など、紀元前後頃までを造営年代とする最初期の石窟のみに見られる柱の内傾<sup>⑨</sup>は、マーンモーディー第四十窟においては示されず直立していることから、マーンモーディー第四十窟の柱は、紀元後一世紀を下る様式的特徴を示すものと考えられる。さらに、柱基をもつ最初の例であるナーシク第十八窟の列柱に刻出された銘文が紀元後一世紀中葉に比定されることから<sup>⑩</sup>、マーンモーディー第四十窟はこれと同時期か、やや遡ると仮定することができる。

マーンモーディー第四十窟の早期造営という仮説は、ストゥーパの様式によって補強される。ストゥーパの様式は、紀元前一世紀頃までの最初期においては円筒形の基壇上に半球状の覆鉢が載せられ、頂部に平頭と呼ばれる欄楯を置く構造をとり、基壇・覆鉢ともに裝飾は一切施されない。時代を下ると、平頭上に逆ピラミッド型の柱頭状の要素が付加されて、その上に傘竿、傘蓋が載せられるとともに、基壇上縁部は欄楯帯で裝飾されるようになる<sup>⑪</sup>。マーンモーディー第四十窟のストゥーパは、基壇と覆鉢のみで構成される無裝飾のもので、未完の堂内にあつて表面が整えられていることから完型にあると見なしてよい「図5」。従つて、ストゥーパの様式のみからマーンモーディー第四十窟の造営年代を考えると、紀元前一世紀を下らないと推定される。同じ堂内の構成要素のうち、列柱が紀元後一世紀初頭の様式的特徴を示すのに対し、ストゥーパはそれを遡る古拙様式を示すことから、これら二つの要素の考察結果において、マーンモーディー第四十窟の造営年代は紀元前一世紀・紀元後一世紀中葉の幅をもつ

て仮定される。

## 第二章 マーンモーデー第四十窟フアサードの銘文および造形的特徴と造営年代

柱とストウーパの様式的考察から得られた幅の広い造営年代は、フアサードについて同様に様式的考察を行なうことによつて、絞り込むことが可能である。入口上部の半円区画内に刻出された銘文は、石窟玄関の寄進を記録している<sup>⑫</sup>ことから、銘文がフアサード造営と同時期に刻まれたことを示しており、銘文の字体分析と造形要素の様式的考察を並行することによつて、より確実な造営年代の比定が可能であると考えられる。前期仏教石窟の銘文の字体を包括的に分析した二つの先行研究は、マーンモーデー第四十窟と同時期の字体をもつ銘文として、ナーシク第十八窟堂内の柱に刻出されたもの（以下、ナーシク第十八窟銘文と呼ぶ）を一致して挙げている<sup>⑬</sup>。ナーシク第十八窟銘文は、ハクシリ王の孫娘による石窟造営の寄進を記録しており<sup>⑭</sup>、ジュンナル石窟の西方約三十キロメートルに位置するナーナーガート石窟の銘文にも、ハクシリという名が確認される<sup>⑮</sup>。ハクシリとは、デカン一帯を掌握したサータヴァーハナ朝第三代サータカルニの息子であり<sup>⑯</sup>、サータカルニの支配年代は紀元前十二年から紀元後四十四年と比定されている<sup>⑰</sup>。サータカルニの長期支配は、彼の存命中にすでに後継世代が成人年齢に達していたことを推測させ、サータカルニと孫の活動年代には、それほど大きな開きはないと考えられる。従つて、ナーシク第十八窟銘文は紀元後一世紀第二および第三四半期頃に刻出されたと推定され、これと類似した字体形式を示すマーンモーデー第四十窟銘文もまた、同時期に帰することができる。

マーンモデー第四十窟のファサードは、上部と左右に帯状の枠が巡らされ、長方形を形成している。左右の帯は、この長方形の上辺と下辺の中間地点まで延びている。この点は枠の内側において、チャイティア・アーチと呼ばれる半円形の尖頭アーチの基点にあたり、アーチの尖頭部分は上部帯の下辺中央部分に接している。同型アーチの縮小形は、上部と左右の枠にも表されている〔図6〕。上部帯の場合、下側三分の一を占める欄楯文様上に水平方向に七つのチャイティア・アーチが並んでおり、尖頭は上辺に接している。アーチ間の空間も欄楯文で埋められ、その上にはさらに寸法を縮小したチャイティア・アーチが表される。これに対して、左右帯は欄楯文によって垂直方向に区画されている。上部帯と同様、欄楯文様上に小型のチャイティア・アーチを載せ、アーチ両側の空間を欄楯文で飾り、その上にさらに小型のチャイティア・アーチを置いている。

長方形の枠内の大チャイティア・アーチは、尖頭部両側と左右枠の間に水平帯が巡らされ、その上に人物像とストウーパが表されている〔図7〕。アーチの尖頭を挟んで立つ一対の像については、鳥人ガルダと竜王ナーガであるとする説、ガルダを有翼の天人とする説など、絶対的な同定がなされていない。この問題は次章において詳細な検討を加えるので、ここでは概略的な説明にとどめておく。

左右に表されたストウーパ〔図8〕は、基壇、覆鉢、平頭、柱頭、傘竿、傘蓋によって構成されており、基壇と覆鉢のみの初期的様式を示す堂内のストウーパより年代的に下る様式を示している。しかしながら実際には、最初期の例に限らず、石窟寺院の堂内に彫りだされた石製ストウーパには、傘竿と傘蓋が現存しないものが多い。これは、木製の傘竿と傘蓋を柱頭に差し込む場合が多かったと考えられるためで、ベードサー第七窟〔図9〕やカールレー第八窟など、木製傘竿と傘蓋を残す例からも理解される。石製の傘竿と傘蓋が登場するのは、チャイティア窟が平天井を有するようになった紀元後二世紀中葉以降で、傘蓋が天井に接する形式が一般的である〔18〕。マーンモ

ディー第四十窟ファサードに表されたストゥーパは、傘蓋と上辺の間に空間が見られることから、紀元後二世紀中葉に登場する、傘蓋と天井が接する一枚石のストゥーパではなく、それ以前に一般的であった、柱頭に木製傘蓋と傘蓋を差し込む形式のストゥーパを模した可能性が高い。ファサード外枠の小チャイティア・アーチにおいては、木製の肋材の模刻など細部表現が行き届いていることから、ストゥーパの基壇が無装飾であるのは細部表現の省略ではなく、無装飾のものとして表されたと見ることができると考えられる。基壇上部に欄楯文様の帯が巡らされる例は、ナシク第十八窟のストゥーパが最初の例と考えられる<sup>19</sup>ことから、マンモーディー第四十窟ファサードのストゥーパは、これをやや遡る紀元前後の転換期から紀元後一世紀中葉に年代付けられ、先に堂内の列柱の様式から推定した石窟の造営年代および銘文年代とほぼ一致する。

ストゥーパと一对の像を載せる水平帯、大チャイティア・アーチ、外枠に閉じられた三角形の空間のうち、向かって右側に方形の周壁のようなものに囲まれた聖樹の表現が確認される「図10」。聖樹には花綱が掛けられ、頂部からは傘竿と傘蓋が伸びている。その左側に表された判別不明の要素は、聖樹表現における一般的な図像プログラムと照合すると、聖樹に花綱をかける天人を表そうとした可能性が高い。初期仏教においては、仏陀や高僧は人格化表現を許さないほど偉大であると考えられたことから、仏教発生以前から民間で広く信仰されてきた、聖樹などの要素がその表象物として採り入れられた。仏教美術およびインド彫刻の起点といわれる、パールフトのストゥーパを囲む欄楯に施されたメグダイオン浮彫においてもすでに、仏陀の象徴としての菩提樹を礼拝する場面が数例見出される<sup>20</sup>。しかしながら聖樹は、石窟寺院の装飾モチーフとしては、ストゥーパ、法輪、三宝標ほど使用されておらず、一方パールフトを起点とするストゥーパ建築においては頻出する。サータヴァーハナ朝第三代サータカルニの工人による寄進銘をもつことから、マンモーディー第四十窟と年代的に近接すると思われるサンチー第一塔塔門<sup>21</sup>

にも、聖樹礼拝図が少なからず表されており、これらは象徴表現の点において、ストウパー建築が多く生み出された中インドと、石窟寺院の主要分布地域である西インドとの関連を示唆している。

マーンモデーイ第四十窟の造形要素のうち、造営年代を最も確実に示しているのが、入口開口部と大チャイティヤ・アーチである。チャイティヤ・アーチは、チャイティヤ窟のファサード装飾において、中央部分を大きく占める重要な造形要素といえることができ、造営年代による様式変遷を明確に辿ることができる。最初期の例は、バージャー第十二窟〔図11〕やコングダーネー第一窟に見出され、チャイティヤ・アーチは入口と一体化し、アーチ部から地表まで完全に開かれている。第二段階を示すのはアジャントア第九窟とナーシク第十八窟〔図12〕で、窓としてのチャイティヤ・アーチと入口が上下に分けられた二重構造となる。ペードサー第七窟〔図13〕において示される第三段階は、ヴェランダの付設という、チャイティヤ窟のファサードにおける最大の構造的変化を見せる。その後カールレー第八窟やカンヘーリー第三窟といった、旧来のドーム天井と馬蹄型プランを保持するチャイティヤ窟においては、ヴェランダ奥壁部にチャイティヤ・アーチと入口を分けた二重構造が保持される一方、紀元後二世紀中葉に発生した平天井と方形プランを有するチャイティヤ窟においては、ファサード前面におけるヴェランダ付設が一般化するとともに、その奥壁には簡素な方形の入口が開かれるのみとなり、チャイティヤ・アーチは見られなくなる<sup>22)</sup>。

マーンモデーイ第四十窟ファサードは、大チャイティヤ・アーチと入口が一体化して開かれてはおらず、ヴェランダは付設されていないことから、その造営年代はバージャー第十二窟やコングダーネー第一窟より下り、ペードサー第七窟を遡ると推定され<sup>23)</sup>、第二段階がマーンモデーイ第四十窟の造営年代に最も近接することになる。しかし、第二段階の一般的構造において水平に切り取られる入口上部は、マーンモデーイ第四十窟においてはアー

チ型を呈している。また、そこから大チャイティア・アーチに至る三日月型の空間は窓として開かれず、いわゆる  
ブラインド・アーチ(盲窓)として作られており、半円形の区画内に半蓮浮彫が施されている。各蓮弁内には、ガジャ  
ラクシュミーと男女供養者像が表されており、その主題と様式については次章で考察する。

チャイティア・アーチと入口の間を窓ではなくブラインド・アーチとする例は他に確認されないことから、これ  
を第二段階の様式からの地域的変容とする見解<sup>2)</sup>がこれまで有力であった。しかしながら筆者は、マーンモーデー  
第四十窟のブラインド・アーチは、ファサード開口部を入口としての実用性から縮小した結果であると考える。な  
ぜなら、マーンモーデー第四十窟の大チャイティア・アーチは地面から立ち上がる側壁と自然に結ばれており〔図  
14〕、構造上の概念において、入口上の水平帯に独立して載せられた第二段階のチャイティア・アーチよりも、第一  
段階のそれに近接していると思われるからである。また、入口上部がアーチ型を呈するものの無装飾であることか  
ら、第二段階の様式のように大チャイティア・アーチとは別に入口上部にもチャイティア・アーチを設けるという  
着想が現れていなかったものと考えることができる。従って、マーンモーデー第四十窟ファサードにおける開口  
部の構造は、バージャー第十二窟に代表される最初期段階から、ナーシク第十八窟に代表される第二段階への過渡  
的段階に位置付けられる。

マーンモーデー第四十窟の各造形要素および銘文の考察から導き出された年代を照合すると、全てにおいて  
ナーシク第十八窟と同時期かやや遡るといふ共通項が見出される。ナーシク第十八窟は、サンンチー第一塔塔門と  
彫刻の様式的特徴が類似することから、造営年代が同じ紀元後一世紀前半期に帰せられており<sup>3)</sup>、マーンモー  
デー第四十窟の造形要素によって算出された紀元前一世紀から紀元後一世紀中葉の年代幅に含めることができ  
る。銘文の字体形式においては、マーンモーデー第四十窟とナーシク第十八窟は、ともに紀元後一世紀第二・第

三四半期に帰せられるため、様式的特徴に基づくナーシク第十八窟の造営年代と照合すると、紀元後一世紀第二四半期頃を最も妥当な造営年代とすることができる。以上の考察から、マーンモーディー第四十窟の造営年代は、紀元後一世紀前半期と推定されるのである。

### 第三章 ファサード浮彫の主題表現と様式的特徴

ジュンナル石窟の全チャイティア窟のうち、マーンモーディー第四十窟は唯一、ファサード装飾において人物表現を有し、それらは大チャイティア・アーチの尖頭部左右と、入口上部ブラインド・アーチの半円区画の蓮弁内に確認される。大チャイティア・アーチの尖頭部左右に表されている人物像は、その位置関係から対をなすことは明らかであるが、左右それぞれの像がいかなる人物あるいは神格を表し、またそれらが対となっていくかなる主題を表現するのかに関しては、様々な仮説が提出されてきたものの、絶対的な見解は示されていない。向かって左側の像〔図15〕は、頭頂にターバンを結んだような頭飾を置き、左右耳朶に大きな耳飾りを着けて、顔をやや右肩側へ傾けている。両上腕部には腕釧を着け、腰に巻いた帯の端を体の中心に垂らす。伸ばした右足は地面を強く踏みしめ、膝を外側へ曲げた左足の大腿部には、肩を張って肘を曲げた左手が添えられるのに対し、右手は頭上へ持ち上げて払子を握っている。左手肘下には着衣が掛けられ、左肩背後には翼が表されている。向かって右側の像〔図16〕も、ターバン頭飾、左右耳朶の大きな耳飾り、両上腕部の腕釧、中央で垂下させた腰布といった、左側の像と共通した着衣を示している。顔をやや左肩側へ傾け、左足を伸ばすのに対して右腿を上げて膝を曲げる点は、左側の像と逆

向きであるが、左手を脇に添えて右腕を持ち上げる点は左側の像と同じ向きを示している。右肘下および左肘周辺を欠損しているため、右手に持物があるかどうかは判別不可能で、頭背部は蛇のフードに覆われている。

持物をもつ右手を頭上に掲げ、左手を脇に添えるという、左右の像に共通した姿勢は、マーンモーディー第四十窟と同時代の仏教建築において、入口左右に表されたドヴァーラパーラ（守門神）<sup>26</sup>が取る姿勢と強い類似性を示している。ドヴァーラパーラは多くの場合、仏教興隆以前より民間で信仰されていた、ヤクシヤと呼ばれる樹霊を起源に持つ神格の形をとっている<sup>26</sup>。ナーシク第十八窟入口向かつて左脇に表されたドヴァーラパーラ〔図17〕は、両脇を閉じて左手を垂下させているものの、右手を持ち上げて花を握り、顔をやや右肩へ傾ける仕草や、頭飾、耳飾り、腕釧、腰布といった着衣形式はマーンモーディー第四十窟の像容とよく類似している。また、ナーシク第十八窟と造営年代が近接するサンチー第一塔塔門においても、同様の表現が見出される〔図18〕。ナーシク第十八窟とサンチー第一塔塔門において、入口脇に配されたドヴァーラパーラが、宗教空間の入口でその守護の役割を担っていることを考慮すると、類似した像容表現を示すマーンモーディー第四十窟のチャイティア・アーチ尖頭部左右の像もまた、同様の機能を意図して造像されたものである可能性が高い。

しかしながら、マーンモーディー第四十窟のドヴァーラパーラは、向かつて左側の像が翼、右側の像は蛇の頭巾をもち、ナーシク第十八窟やサンチー第一塔塔門のドヴァーラパーラのように、人間の男性の形姿をとるヤクシヤとは明らかに異なっている。マーンモーディー第四十窟のドヴァーラパーラを詳細に考察した最初期の研究は、有翼像を怪鳥ガルダ、蛇の頭巾をもつ像をナーガラージャ（龍王）と同定し、神話において両者が天敵とされることから、生来の憎悪感情を放棄し仏法を信奉すべきとの含意であるという図像解釈を行なっている<sup>27</sup>。蛇の頭巾をもつ像がナーガラージャである点に関しては、ほぼ疑いの余地がないのに対し、有翼像については、ガルダであると

いう見解の支持・不支持が二分し、ひいてはこの読み解きを支持するか否かが長年議論されてきた。ガルダであるとする見解<sup>28</sup>の正統性は、図像解釈における物語の妥当性によって支えられているが、ガルダの擬人化表現はマーンモーディー第四十窟以前には全く確認されないため、もしこれがガルダであるとすれば、最初の擬人化作例ということになる<sup>29</sup>。ガルダであるという見解に否定的な立場からは、この像が単に有翼の天人を表すと主張される<sup>30</sup>が、ナーガラージャと有翼の天人が対をなす例は他になく、またその図像プログラムの意味も不明である。従って現時点においては、マーンモーディー第四十窟のドヴァーラパーラは、ガルダとナーガが対をなしているとの見方が優勢であるが、ガルダ像の擬人化表現の発生については、さらなる検討が必要である。

入口上部のブラインド・アーチの半円区画〔図19〕は、半蓮華として意匠化されており、七葉の蓮弁内に人物像および動物像が浮彫されている。これらの蓮弁型区画の背後には、さらに蓮弁の先端部が菱形の区画を形成しており、内側には開花蓮華を表している。蓮華はほかに、中央と左右端二葉ずつの計五葉の蓮弁区画内に表された人物像の両脇と、中央蓮弁の両脇区画内に表された象の頭上、胴部の前後、台座において見ることができ、インドにおいて蓮華は、仏教発生以前より吉祥の象徴とされ、多くの神格表現において持物や台座として登場する<sup>31</sup>。マーンモーディー第四十窟のブラインド・アーチにおける蓮華モチーフの多用は、民間信仰に起源をもち蓮華とともに表現される、豊穡の女神ラクシュミーを中心とした図像構成のためと考えられる。中央の蓮弁に表されたラクシュミー〔図20〕は、右手は施無畏印をとり左手は腰に当て、身につけた腰布の端を体の中央に垂下させている。左右脇の蓮弁にそれぞれ表された側面図の象は開花蓮華上の円板に載り、中央蓮弁のラクシュミーの方を向いて、端の丸い持物を鼻で持ち上げている。この三葉の蓮弁が、ラクシュミーが左右から象に灌頂を受ける「ガジャラクシュミー」(ガジャ象)の図像を構成していることは確実である。象の左右外側の各二葉には、頭上で合掌する男女の

供養者像〔図21、22〕が表されており、それぞれ中央に向けて体を大きく傾けている。

ガジャラクシュミーの主題表現においては、蓮華座にそれぞれ載る左右の象が鼻で水瓶を持ち上げ、中央のラクシュミーに灌頂するという基本構成があるものの、ラクシュミーの姿勢は様々で、坐像と立像の両方がある。マーンモーデー第四十窟フアサードのように施無畏印をとることはあまりなく、右手には持物として蓮華をもつことが多い。仏教美術においては最初期からガジャラクシュミーの図像を確認することができ、パールフトの欄楯メダイヨン浮彫にも表されている<sup>22)</sup>。マーンモーデー第四十窟と造営年代が近接するサンチー第一塔塔門においても、ガジャラクシュミーを表したパネルが八例確認されており〔図23〕、中インドを中心とする仏教建築の荘厳において、この民間信仰的な主題が好んで取り上げられたことを示している。

しかしながら、西インドの石窟寺院においてガジャラクシュミーの図像は、マーンモーデー第四十窟のほか、ピタルコーラー第四窟とナードスル第七窟の計三例しか確認されない<sup>23)</sup>。ピタルコーラー石窟については、パールフトを様式的規範としていたとの指摘がしばしばなされており<sup>24)</sup>、ピタルコーラー第四窟とパールフト欄楯メダイヨンのガジャラクシュミー図像には、蓮華座上に全て収まった象の脚、端を持ち上げた象の口の開き、ラクシュミーの身体表現における、接続されたような印象をうける腰と臀部のヴォリュームの強調、下側に開花した蓮華といった、多くの類似点が見出される〔図24〕。サンチー第一塔のガジャラクシュミー図像は、身体表現における各部の接合などがより自然に表されているものの、蓮華座上の象の脚や開花蓮華の側面図に関しては、パールフトの表現形式を継承していることが理解される。マーンモーデー第四十窟のガジャラクシュミー浮彫について見ると、象の脚の姿勢や口の開き方、開花蓮華の側面図において、ここでもパールフトを起点とする図像との強い類似性が確認される。西インドの前期仏教石窟は本来、中インドの仏塔建築のように主題表現による荘厳を行なわないことか

ら、三例しか見出されないガジャラクシュミー表現が、西インドにおいて独自に発生した図像構成であるとは考えられず、様式上の多くの類似点から、仏教美術の起点であるパールフトやそれを発展させたサーンチーなど、同時代の仏教文化の中心地である中インドの影響を受けたものと考えることができるのである。

#### 第四章 中インドの仏教文化とマーンモーデーイ第四十窟の関連性

マーンモーデーイ第四十窟の銘文は、ファサードの寄進主を「チャンダという名のヤヴァナ」と記録している<sup>35</sup>。ギリシア人を意味するヤヴァナという語は、前期仏教石窟の寄進銘においてはジュンナルのほか、カールレー石窟やナーシク石窟にも確認される<sup>36</sup>。石窟寺院を含む初期仏教僧院への寄進銘には、寄進者名とともにその職業身分が明記されるのが常であり、例えばジュンナル石窟においても、「家長であるヴィーラセナカ<sup>37</sup>」「財務官の息子スラーサダツタ<sup>38</sup>」など寄進者の素性が明確にされている。しかしながら、ヤヴァナ銘の場合にはマーンモーデーイ第四十窟銘文も含め、その職業身分に関する言及は一切見られない。なぜなら、インドにおいてギリシア人は当時、必然的に商人を意味する存在であったからで<sup>39</sup>、ヤヴァナの語それ自身が、商業に携わる西方起源の社会層を指すものとして理解されていたと考えられる。

インドにおけるギリシア人は、紀元前三世紀にアシヨカ王のもと全盛を迎えたマウリア朝の時代にその存在感を強めていった<sup>40</sup>。マウリア朝の首都パータリプトラは、現在の東インドに位置するビハール州パトナーにあたり、地中海地域との貿易拠点であるアラビア海沿岸部、すなわち現在のグジャラート州とマハラシュトラ州は、王

朝の繁栄と維持にとつてきわめて重要であつた。アシヨールカ王は北インドのほぼ全域にわたる支配地域の道路網を整備し、その要衝において岩壁や石柱に法勅を刻ませており、これらはグジャラート州ジュナーガルとマハーラーシュトラ州ソーパーラにおいても確認される。特に前者においては、グジャラート州を含むサウラーシュトラ半島一帯のマウリア朝総督として、トウシャースパという名の「ヨーナ(Yona)」すなわちギリシア人が派遣されたことを記録しており<sup>④</sup>、またアシヨールカ王治世下に王朝首都で開催された仏教の第三次結集においては、王朝の支配地域における仏教伝道の任務にギリシア人も含まれている<sup>⑤</sup>。こうした事実からは、マウリア時代に商業経済が飛躍的発達を遂げ、旧来の農村社会に属さない新たな社会階級である商人層が有力となり、既存の社会構造に則したバラモン教を否定した仏教が拡大発展する土壤が形成されたことが理解される。インドにおける商業経済の発展に大きく寄与したギリシア人の多くは仏教を支持し、アシヨールカ王は商業を重視する戦略から仏教を厚く保護したので、商業と仏教が相互に関連しながら発展を遂げることとなり、またギリシア人のインド社会への定着も促進された。

マウリア朝の首都パータリプトラは支配地域の東端に位置することから、現在のマディア・プラデーシュ州とグジャラート州の州境地帯にあたるマールワー地方の商業都市ウツジャインに、王朝支配における西側の拠点が置かれた<sup>⑥</sup>。現在のマディア・プラデーシュ州に属し、ベートワー河流域に位置するヴィディシヤーは、両都市の中間地点で水陸双方の交通の要衝にあたることから、中インドの商業拠点として発展を遂げ、それに伴つて中インドにおける仏教文化の拠点としても繁栄した。ペースナガル(ヴィディシヤーの古代名)のガルダ柱として知られる一本岩の独立柱は、現在のパキスタンに位置するタクシラーのギリシア人勢力から、マウリア朝の後継勢力であるシユンガ朝に遺わされた大使ヘリオドロスによつて建立された旨の銘文を有しており<sup>⑦</sup>、マウリア朝以来ヤヴァナがインドの商業拠点と積極的に関わっていたことを示している。

ヴィディシャー郊外に位置するサンチー仏塔群は、商業都市に近接することから、アショーカ王がその掌握を示して法勅柱を建立するとともに第一塔の基礎を築いて以来、インド全域からこの地を訪れる商人層や出家から豊富な寄進が集まり、仏陀の弟子やサンチー地方で宗教活動を行なった高僧を祀る仏塔の建立や拡張が次々に展開された結果、中インドの一大仏教センターとなった<sup>45</sup>。マーンモーディー第四十窟と造営年代が近接するサンチー第一塔塔門には、本稿第三章において述べたように、前期仏教石窟が集中的に分布する西デカン地方を支配したサータヴァーハナ朝の第三代サータカルニの工人による寄進のほか、サータヴァーハナ朝の首都であったプラティシュタナーナ（現在のマハーラーシュトラ州パイターン）の住人からの寄進も四例確認される<sup>46</sup>ことから、双方の都市間に人的および物的往来が存在したことを示している。アラビア海貿易の拠点である西デカン地域を掌握したサータヴァーハナ朝は、首都プラティシュタナーナのほかに、ソーパーラやカリアンといった港湾都市から内陸へ入り、北部および中部インドの商業都市へと結ぶ交通網が必要であった。ジュンナルは、アラビア海沿岸部を縦断するヴィンディア山脈を越える上で、最良の経路であるナーナーガートに近接し、ウツジャインへと北上する交易の要衝であったことから<sup>47</sup>、ウツジャイン以北及び以東のヴィディシャー、カウシャーンビーを経てシュラーヴァステイーに至る北インドの主要路<sup>48</sup>とも密接に関連していたものと考えられる。マーンモーディー第四十窟ファサードの寄進がギリシア人商人によるものである一方で、中インドの仏教美術において好まれた、土着的なガジラクシュミー主題が表現されるという造営状況は、一見したところ矛盾を孕んでいる。しかしながら、中インドにおいて、ギリシア人によるインド文化の受容が積極的に展開されたという背景を踏まえると、マーンモーディー第四十窟には、商業を媒介としてそれらの地域と結ばれたジュンナル地域の社会状況、さらには紀元前後の西デカンにおける仏教と社会経済の関係が映し出されていると理解される。

## 第五章 むすびに代えて

本稿においては、前期仏教石窟の中でも最大規模の窟数を有するジュンナル石窟のうち、裝飾表現の豊富さから、様式的考察を可能とする数少ないチャイティア窟であるマーンモーディー第四十窟について、堂内の構造、ファサードの浮彫表現、銘文の字体と内容を分析することによって、造営年代を推定するとともに、造営の背景にある社会状況を考察した。紀元前後に盛んに展開された仏教石窟の開鑿は、紀元前三世紀を頂点とするマウリア朝支配によって、国内外双方の交易網が整備されたことと大きく関わっており、商業を基盤とする社会経済の発展が仏教の普及を促進したと理解される。西インドの前期仏教石窟においては珍しい主題表現がマーンモーディー第四十窟において見出されるのも、中インドの商業拠点であり、仏教美術の先進地域でもあるヴィディシャーとジュンナルが、商業を媒介として結ばれていたことに起因し、様式的影響を受けた結果であると考えられることができる。

本稿も含めて、ジュンナル石窟群それ自体の存在意義を明らかにすることが今後の目標である。そのためには、社会状況の展開と様式的変遷を密接なものと捉え、ここでは取り上げなかった考古学や古銭学の成果も生かすことよって、造形美術に主要な着眼点を据えつつも、より多角的に紀元前後の仏教僧院の実態を明らかにしていく必要があると考えられる。

### 註

- (1) 平岡三保子「西インドの石窟寺院―仏教石窟寺院の発生と展開―」『世界美術大全集 東洋編 インド(1)』(小学館、二〇〇〇年)二百五十七頁。

(2) インド考古局による分類は、各丘陵を一支群と見なし、丘陵名を支群名としている。すなわち、町の南方一キロメートルにあるマーンモデー丘陵、西方三キロメートルのシヴェネリー丘陵、西方五キロメートルのトゥルジャー丘陵、北方四キロメートルのレーニアードリー丘陵である。一般にはさらに、マーンモデー石窟とシヴェネリー石窟をそれぞれ三支群に、レーニアードリー石窟を二支群に分けて理解してゐる。M. K. Dhavalikar, *Late Hinayana Caves of Western India*, Poona, 1964, pp. 12-28.

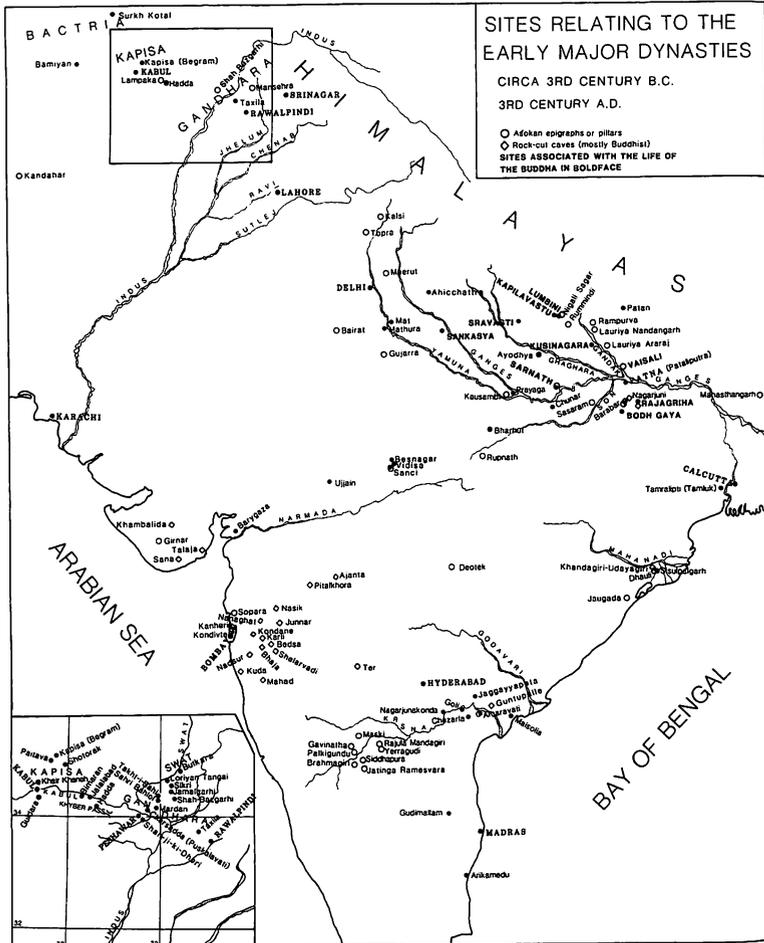
(3) 窟数については、崇拜対象である仏塔(ストウーパ)を祀る礼拝窟(チャイティア窟)と、出家の居住空間である僧院窟(ヴィハハラ窟)のみを算出対象とする場合と、それらに加えて貯水槽も窟数に含める場合とがある。インド考古局は、前者の方法に基づいて石窟本体に窟番号を付しており、一九七〇年代までの研究の多くはこれに従った。Vidya Deheja, "Early Buddhist Caves at Junnar", *Arribus Asiae*, XXXI, 1969 (以下、Deheja, *AA*と略), p. 147. これに反し、近年の歴史学研究が、仏教僧院の維持における貯水槽の重要性を明らかにしていることから、一九八〇年代以降の研究においては、後者の方法、すなわち貯水槽を含めた窟数の算出が主流となっている。ジュンナル石窟はこれに基づくと、チャイティア窟十窟、ヴィハハラ窟百七十四窟、貯水槽百十五窟で、分類不可能である未完窟を加えると総計三百二十四窟と算出される。Dhavalikar, *op. cit.*, p. 12.

- (4) Deheja, *AA*, *op. cit.*, pp. 165-166.
- (5) 平風『前掲書』一五五―一五八頁。
- (6) Seshabhata Nagaraju, *Buddhist Architecture of Western India*, Delhi, 1981, pp. 140-159.
- (7) Vidya Deheja, *Early Buddhist Rock Temples*, London, 1972 (以下、Deheja, *EBRT*と略), p. 73.
- (8) *Ibid.*, pp. 81-82.
- (9) 平風『前掲書』一五六―一五七頁。
- (10) Debala Mitra, *Buddhist Monuments*, Calcutta, 1971, p. 169. 肥塚隆「Satavahanan朝の仏教石窟」『日本仏教学会年報』(一九七三年)五十一―五十二頁。
- (11) Nagaraju, *op. cit.*, pp. 72-77.
- (12) James Burgess and Bhayvanlal Indrajai, *Inscriptions from the Cave-Temples of Western India*, Bombay, 1881, pp. 43-44. H. Lüders, "A List of Brahmi Inscriptions", *Epigraphia Indica*, X, Appendix, Calcutta, 1912, p. 131. James Burgess, "Report on the

- Buddhist Cave Temples and Their Inscriptions”, *Archaeological Survey of Western India*, IV, Reprint, New Delhi, 1994 (以下 ‘Burgess, *ASWI IV* 参照), p. 95 (Original Edition, London, 1883) .
- (13) Deheja, *EBRT*, *op. cit.*, pp.204-205. Nagaraju, *op. cit.*, Chart III.
- (14) Burgess, *ASWI IV*, *op. cit.*, p. 99. E. Senart, “The Inscriptions in the Caves at Nasik”, *Epigraphia Indica*, VIII, Reprint, New Delhi, 1981, p. 91 (Original Edition, Calcutta, 1905-1906) .
- (15) G. Bühler, “The Nanaghat Inscriptions”, in James Burgess, “Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India”, *Archaeological Survey of Western India*, V, Reprint, New Delhi, 1994, p. 64 (Original Edition, London, 1883) .
- (16) *Ibid.*, pp. 65-68.
- (17) Ajay Mitra Shastri, “Puranas on the Satavahanas: An Archaeological-Historical Perspective”, in Ajay Mitra Shastri, ed., *The Age of the Satavahanas*, Vol. I, New Delhi, 1999, p. 25.
- (18) ヲヴァリカールは、平天井の空間に基壇から傘蓋まで一枚石でストゥーパを彫りだした最初の例は、同じジュンナル石窟マンモーディー丘陵に開鑿された、アンビカー石窟の第二十五窟であるとの見解を示している。彼によると、紀元後第二四半期の造営とされるアンビカー石窟のチャイティア窟である第二十六窟の開鑿が、岩盤の崩落によって放棄され、代替的なチャイティア窟の礼拝機能の必要性から、第二十六窟の東隣に第二十五窟が造営された。従って、第二十五窟の造営年代は、第二十六窟の造営年代とほぼ同時期かやや下ると考えられる。 Dhavalikar, *op. cit.*, p. 19. 14基の奉獻ストゥーパを祀るパーシャー第十五窟においても、マンモーディー第二十五窟と同形式のストゥーパが確認されるが、銘文の字体形式の分析が未だになされておらず、造営年代は不明である。デヘジヤは、パーシャー石窟全体の開鑿が、紀元前一世紀初頭のチャイティア窟造営を起点として、四十年以上かかっただけではないとの見解を提示している。 Deheja, *EBRT*, *op. cit.*, pp. 153-154. これに従うと、地面及び天井と接した一枚石のストゥーパが、紀元前一世紀に既に現れていたことになるが、パーシャー第十五窟の不規則なプランは、明らかに後代の拡張によるものである。増床部分すなわち奥壁付近のストゥーパにおいてのみ、傘蓋と天井が接しているのが見られ、西インドの他の石窟寺院においては、この様式は紀元後二世紀以降に初めて現れる。従って、パーシャー第十五窟のストゥーパには年代幅があると考えるべきであり、全て紀元前一世紀に帰せられる可能性は低い。
- (19) Nagaraju, *op. cit.*, p. 74.

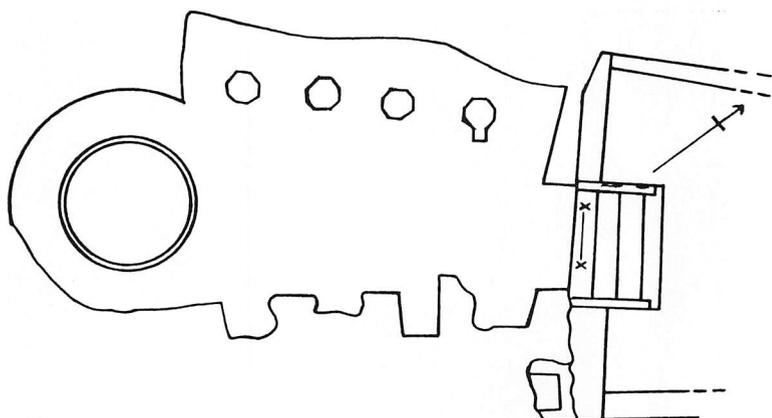
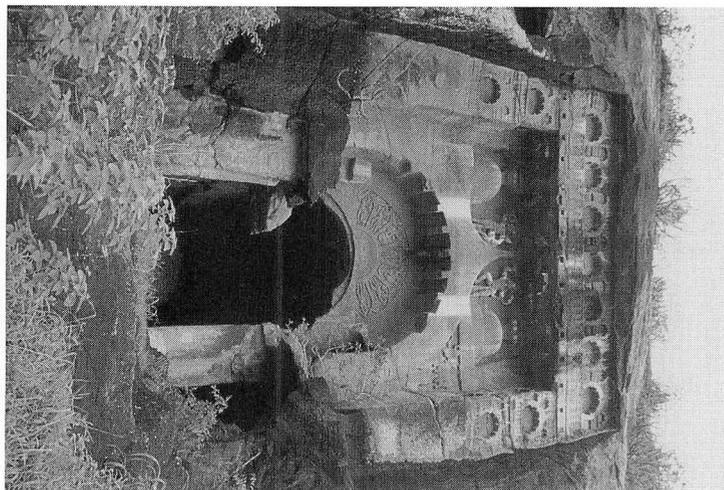


- (38) *Ibid.*, p. 94.
- (39) Himanshu Prabha Ray, *Monastery and Guild: Commerce under the Satavahanas*, New Delhi, 1986, p. 195.
- (40) ショーシ・ウツドコック(金倉圓照)塚本啓祥訳『古代インドとギリシア文化』(平樂寺書店、一九七二年)五十六頁。
- (41) Lüders, *op. cit.*, no. 965.
- (42) ウツドコック、前掲書、五十八頁。
- (43) Sukumar Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, Reprint, Delhi, 1988, p. 121 (Original, London, 1962) .
- (44) Senarat Paranavithana, *The Greeks and the Mauryas*, Ceylon, 1971, pp. 108-115.
- (45) Willis, *op. cit.*, pp. 12-23.
- (46) Marshall and Foucher, *op. cit.*, nos. 214, 229, 546, 717.
- (47) Delip K. Chakrabarti, *The Archaeology of the Deccan Routes*, New Delhi, 2005, p. 152.
- (48) Ranabir Chakravarti, "Merchants and Other Donors at Ancient Bandhogarh", *South Asian Studies*, 11, 1995, p. 40.



1. 古代インド美術史跡地図 (after Susan L. Huntington, *The Art of Ancient India*, New York and Tokyo, 1985, map 3)

2. マーンモーディー第40窟 正面



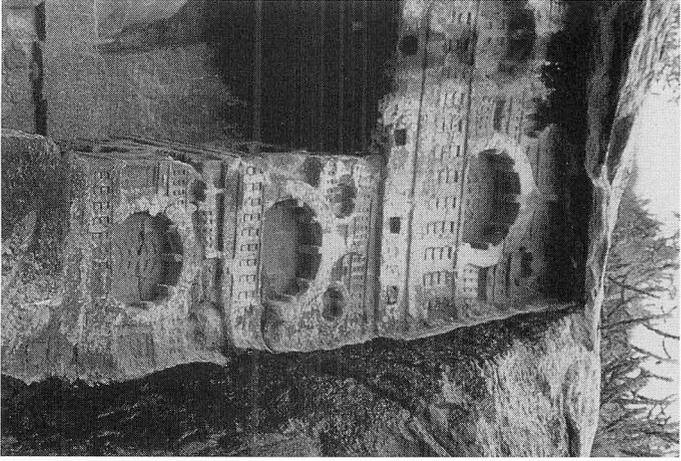
3. マーンモーディー第40窟 平面図 (after M. K. Dhavalikar, *Late Hinayana Caves of Western India*, Poona, 1984, p. 15)



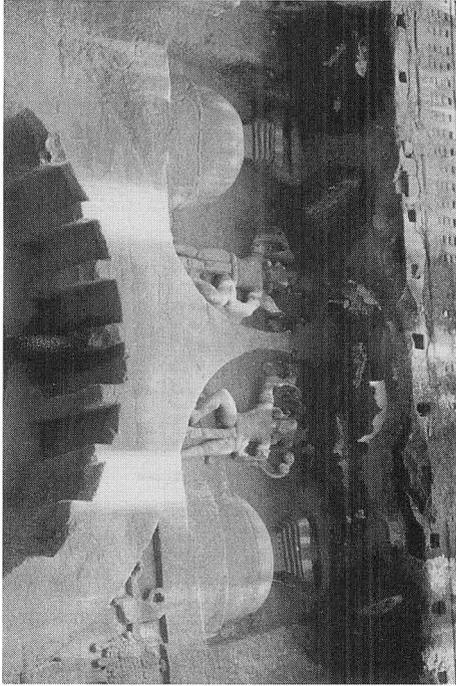
4. マーンモデーイ第40窟 室内右側壁



5. マーンモデーイ第40窟 ストウパー

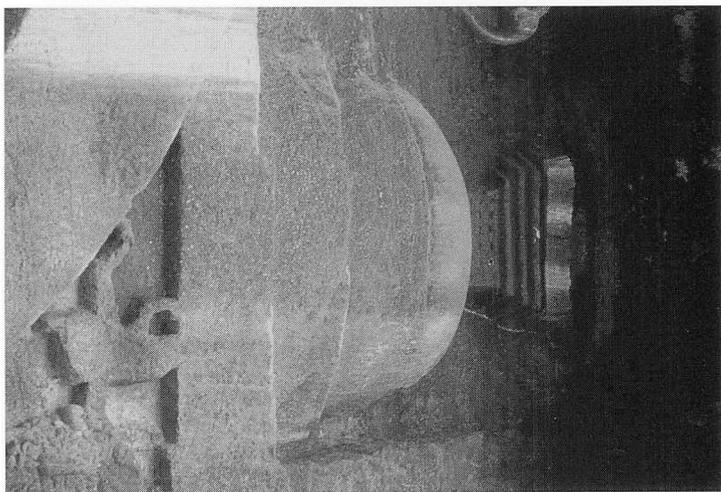


6. マーンモーデーイ第40窟フアサード 外壁部分

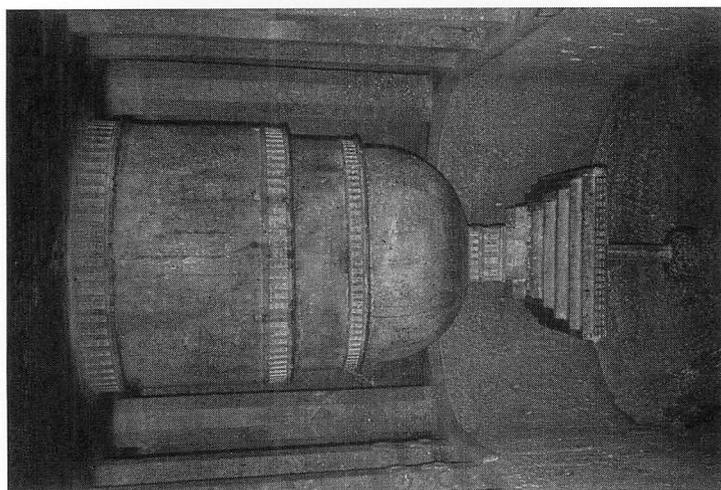


7. マーンモーデーイ第40窟フアサード チャイナイアアアチ尖頭部左右脇

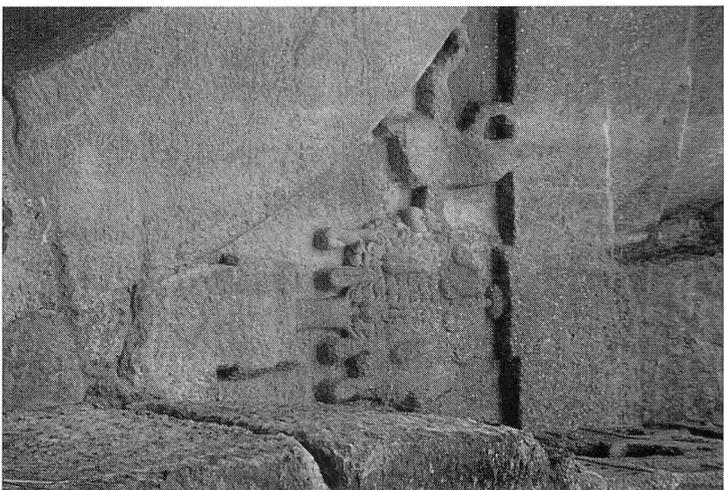
ジュンナル石窟マーンモーデーイ第四十窟の造営意義に関する一考察



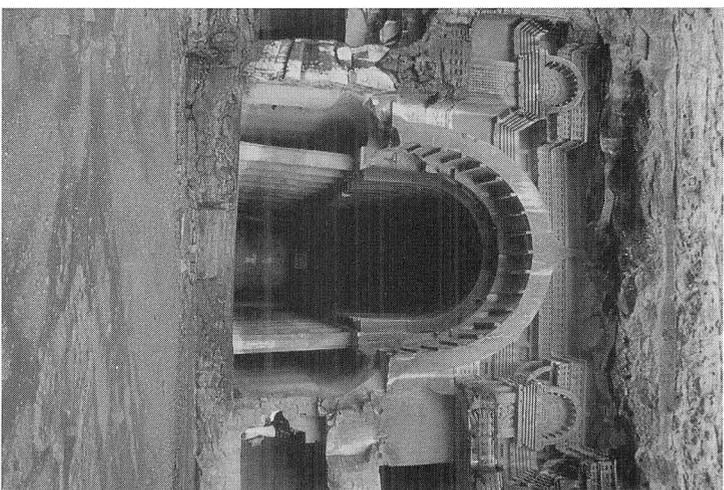
8. マンモディー第40窟フネサード ストウーン浮彫



9. マードサー第7窟 ストウーン

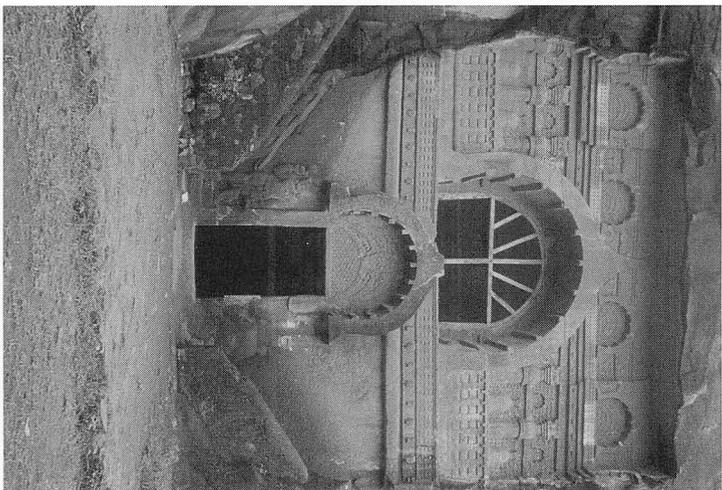


10. マンモーデーノ第40窟フナサード 聖樹浮彫図

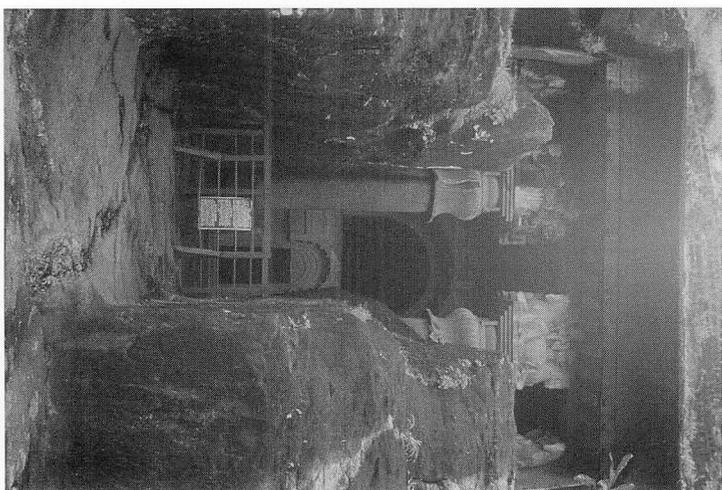


11. ハーヂヤー第12窟 正面

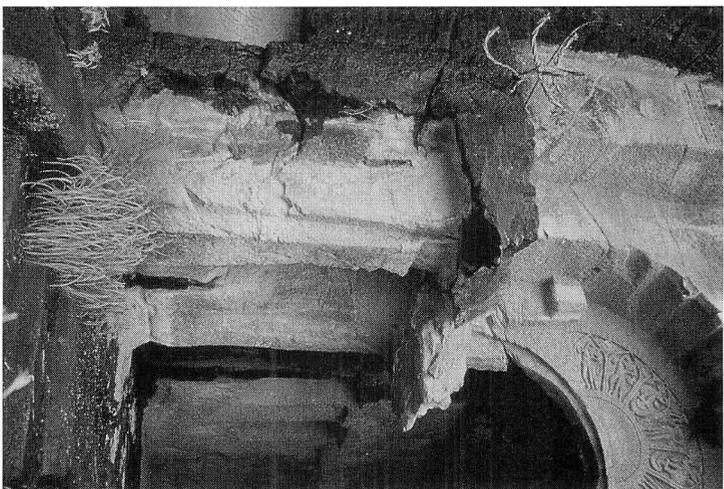
ジュンナル石窟マンモーデーノ第四十窟の造営意義に関する一考察



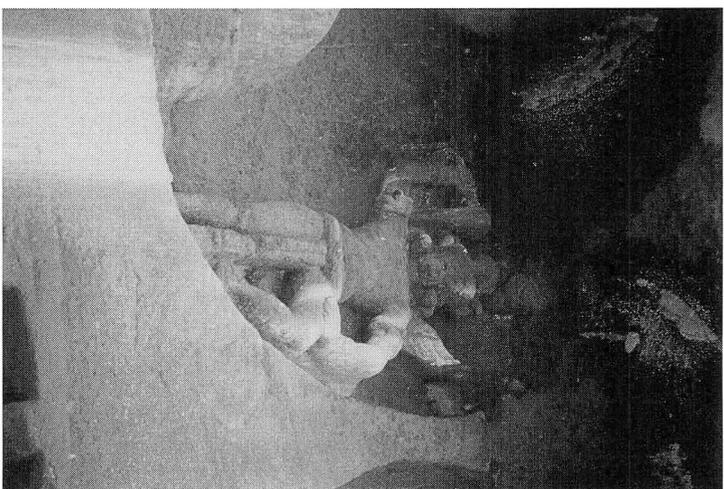
12. ナーシク第18窟 正面



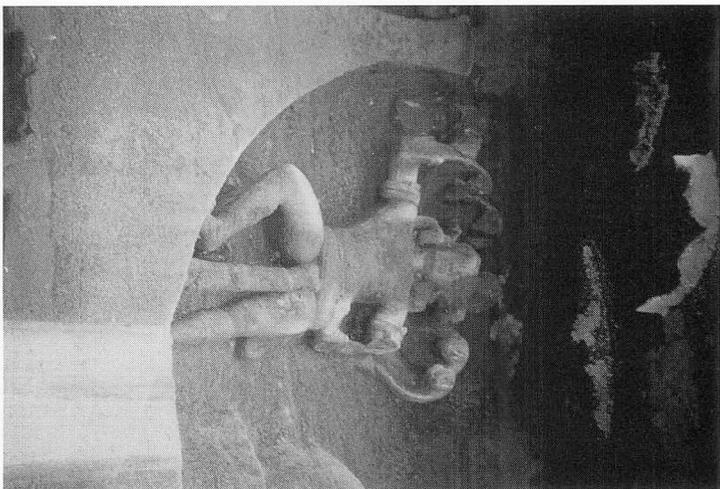
13. ネードサー第7窟 正面



14. マンモデー第40窟開口部 北側より



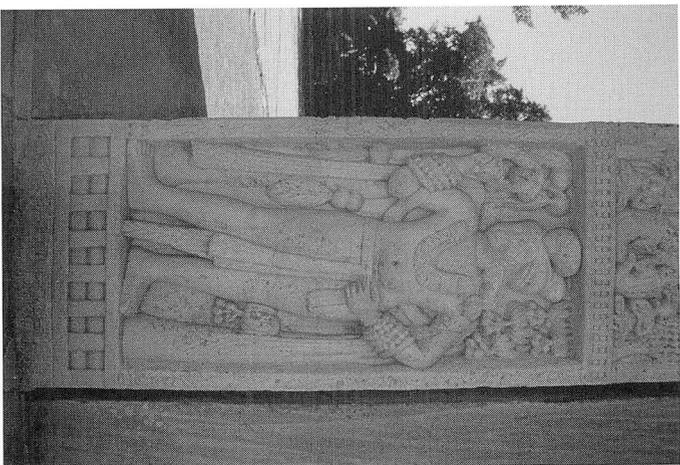
15. マンモデー第40窟フアサード ガルダ像



16. マンモーディー第40窟フアサード ナーガ像



17. ナーシク第18窟入口左脇 フヴァーラパーラ像



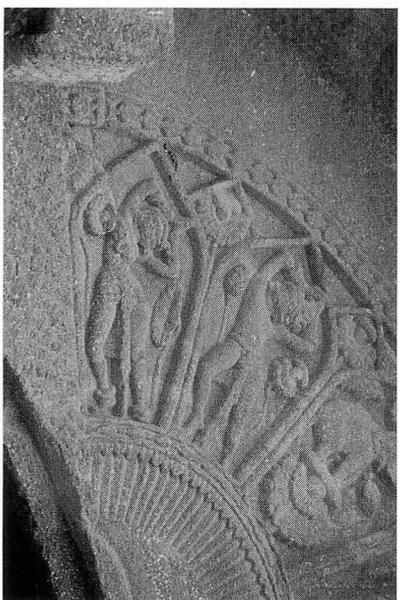
18. サーチー第一塔北門 左柱内側ヤクシヤ像



19. マンモーザナー第40窟フナサード フライインゴ・ブーチ



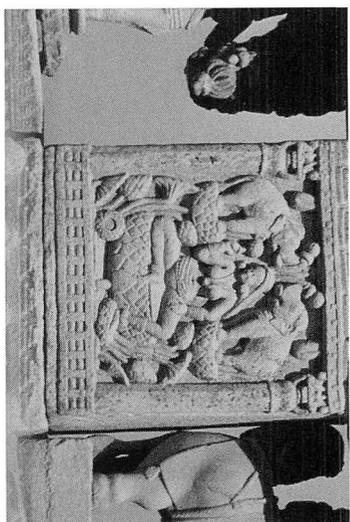
20. マンモデー第40窟フテサード ガジヤ  
ラクシュミー浮彫図



21. マンモデー第40窟フテサード 左供養者像



22. マーンモーデー第一40窟フアサード 右供養者像



23. サーチー第一塔北門 第2・第3棟梁間左ノロツク  
ガジャラククシユミー浮彫図



24. ピタルコーラー第一窟 入口付近より飛馬 ガジャラククシユミー浮彫図 (after M. N. Deshpande, "The Rock-Cut Caves of Pithakhora in the Deccan", *Ancient India*, 15, 1959, Plate. LV. A)